

## あきらめさせない・あきらめない

介護老人福祉施設 にしがも舟山庵 山本みどり

ソーシャルワーカー（以下 SW）は、病いや障害をもちながら生活する人たちやそのご家族と出会う。発病からの道のりは異なるが、いくつもの困難やストレスを経験し「あきらめるしかない」とパワーレスな状態でお会いすることが少なくない。SW はそこから支援をはじめることになる。

### 事例 A

大学病院から転院してきた患者の妻（50代）が来室した。視線を落とし憔悴した様子で経済不安を語った。夫には厚生年金加入歴があり、障害年金受給の可能性がある。しかし、それを話題にした直後、「無理です」「疲れました もういいです」と年金以外の方法を求めた。過去の年金申請で、役所の指示に従い診断書の修正を求めて大学病院に3回出向いたが、それでも受理されなかったと言う。

SW は、障害年金は今後の生活の中心になるため申請まで一緒に動くからと言葉を尽くし、不備とされていた初診日の設定については、妻を支えながら仕上げた資料を基に当院医師の協力をとりつけた。申請が受理され裁定を待つだけとなった時、妻は「来てよかった」と表情を和ませた。（後に受給決定）

### 事例 B

30年余の長期透析による合併症で寝たきりとなったMさんの退院支援を開始した。自宅のベッドから病院透析室までの全行程に車いす介助が必要で、住環境整備の関係者訪問時、玄関の段差が最大のネックとなった。昇降機の検討は福祉用具専門員が中心になり、手持ちのカatalogを数枚めくり「狭いからどれも入りませんねえ」と軽く答えた。SW は、そんな安直なレベルで断念できないとの思いを強くし、専門員に「Mさんが生涯自宅で暮らせなくなるか瀬戸際の判断である」「この情報社会、日本中を探してほしい」「日本中にそれが存在しないのであれば、私もあきらめます」と迫った。

そして数日後、設置できる昇降機が見つかったのである。入院から3ヶ月後、あきらめない支援が、最重度となったMさんの通院透析再開を可能にした。

### あきらめさせない・あきらめない

事例 A は、年金申請を完全にあきらめていた CI に対して、支えながら共に課題に取り組むことで、あきらめない CI へと変化した。SW は、何よりもあきらめさせないことに傾注した。事例 B は、昇降機は「入りません」と専門員が答えた時、ここであきらめたら問題解決への道筋が途絶える瞬間だと感じた SW は、あまりに安直な「結論」に怒りを覚え、それをMさん支援の言葉に変えて発信した。この時のあきらめない支援行動は、SW が全身全霊をかけたと言っても過言ではなかった。

このように、(CI を) あきらめさせない、(SW が) あきらめないことに最善を尽くすことは、ソーシャルワーカーの使命に沿い、専門職としての責任を果たす方向をもつものである。CI が背負っている重荷を全身で感じるスキルを磨き、「結果を出すために、どのような手助けができるだろう」と真剣に問い続ける実践を続けたい。（事例は当事者了解の下、『日本社会福祉学会研究倫理規定にもとづく研究ガイドライン』をふまえ、個人を特定する情報を極力削除または再構成したものである。）